札幌大学サークル会館（部活棟）「婦人論研究会」と「ロシア語研究会」の思い出

小林　領子

一九七〇年、それまでなかった文科系のサークル活動のため、キャンパスの南側にサークル会館（正式名称＝部活棟）ができた。会館と言っても工事現場の飯場のようなプレファブ二階建てで、内部の壁や床も薄いベニヤでしきっただけ、廊下は歩くたびに軋み、揺れるほどのひどいものだったが、学生たちにとって部活の拠点ができた喜びは大きかった。

私の所属サークルの名前は「婦人論研究会」（以下「婦人論」）で、二階の一〇帖ほどの一室を天井の間に三〇センチほどの空間を残したまま二メートルほどの高さのベニヤでただ間仕切っただけの雑造作であった。一方、丸見えの同室サークルは「ロシア語研究会」（以下「ロ研」）であった。

「婦人論」はドイツの思想家Ａ・ベーベルの著作にちなんで命名し、女性の歴史、現状、未来を研究する会として、ロシア語学科三年の佐々木美知子氏、富樫和恵氏と私の三人で発足し、のちに経済学部の菅原民江氏、山本恵子氏、短大生数人が加わり徐々に部員も増えて部室はまさに華やかな女の園（アジト）という雰囲気となった一方、「ロ研」は真面目で勉強熱心と思われる男子生徒が中心。部室は入口が一つで中に入ると二つに分かれ、まるで銭湯の女湯と男湯の雰囲気。婦人論は常に何人かが講義の間の暇つぶしでたむろし、時々真面目に読書会などやっていたが、なぜか酒瓶がおいてあり、気が付くと一杯やりながら大声で議論に花をさかせる会でもあった。一方、「ロ研」はロシア文学などの原書を数人読み合わせがなされ、真面目な雰囲気、時として聞こえるのは辞書をめくるパラパラという音ぐらい。それほど対照的な両部がなぜ同室になったのかは今もって不思議としか思えない。

新入生が「こちらはロシア語研究会ですか？」と入部に訪問すると、「今はいないけれど、そのうち来るよ」「マー、こちらで待っていたら」と「婦人論」のコーナーへ誘導、巧みなよもやま話で相手の懐に入り込み、頃合いを見計らって「マー、とりあえず一杯」などとお酒をすすめ、気が付くとすっかり「婦人論」で拉致してしまうということもあった。まさに、婦人論は女郎蜘蛛のごとき、粘着力のある網をはり、ロ研に興味をもった真っ新な新入生男子をつぎつぎと蜘蛛の糸で丸め込んでゆく仕掛けがあったように思われる。

陰と陽、水と油のような雰囲気の両サークルであったが、しばらくするとすっかり仲良くなり、お互いに自由に間仕切りを超えて出入りし、「婦人論」「ロ研」の両部に所属する男子メンバーもいて、気が付けば銭湯は完全な混浴状態となっていた。

時にはバスをしたて、両部のリクレーションとして支笏湖へもでかけた。車中を見渡すと、前方三列目にロシア語学科の相馬先生が茶色いベレー帽をかぶりなにげなく同乗していた。相馬先生は札幌大学に赴任間もなかったので学生との交流の場として参加したのではと思う。

バスはわきあいあいと支笏湖へむかったが、ガイドを任された「ロ研」一年生の高瀬達志氏が道すがら歌を歌おうと提案して、民謡の「でんでらりゅうば」を皆に覚えさせ、なんども何度も意味不明な歌をうたわされた。いまでもこの歌は頭について離れない。氏からの道案内はほとんどなく、到着までただ何度も何度も繰り返し歌わせられたのだ。「でんでらりゅうば、でてくるばってん……」のこの歌は私にとって怨念の歌である。

しかし、最近知ったことだが、長崎の民謡でロシア艦隊の旅順包囲、隠れキリシタン、丸山遊郭に関する歌などの諸説がある謎の歌であるという。

四年になり、そろそろ就職活動をしなければならなくなった。まわりの友人は次々と決まり、どこか見つけなければと焦る思いで大学の就職課を訪ねると、就職課の女性職員は部厚い資料をめくりながらすまなそうに「四年制女子の就職先はないんですよね」とのこと。それでもどこかないかと食い下がると、「就職は考えず、結婚なさったら」といわれた。「婦人論研究会」で自立した女性を目指し、いざ社会へと意気揚々であった私は頭にきて、就職先は自分で見つけようと決意した。

当時の女子学生にとっての就職難は、かつての「就職氷河期」どころか、古生代の先カンブリア紀ほどのひどいものだった。

右奥アイボリーの建物が両サークルの入部した初期サークル会館(部活棟)
札幌大学３０年史「札幌大学のあゆみ」より